凡　例

一　本全集は現存するアリストテレスの全著作を訳出したものである。

一　著作の配列は基本的にI・ベッカーの編纂した「ベルリン・アカデミー版アリストテレス全集」(*Aristotelis opera ex recensione Immanuelis Bekkeri*; edidit Academia Regia Borussica, Berolini, 1831–70)の第一巻、第二巻に準拠し、その後に『アテナイ人の国制』(一八九一年初公刊)と逸失著作からの「断片集」を追録した。

一　各著作には個別の「凡例」を付し、底本その他、当該著作に固有の事項について記載した。

一　各著作には「目次」の後に訳者が作成した「内容目次」を付した。

一　各著作本文の欄外上部の算用数字はベッカー版の対応頁数、aはその左欄、bはその右欄であることを、またa、bの後の算用数字は一〇行ごとのおよその対応行数を示す。アリストテレスの著作の箇所指示は、著作名・巻・章の後にこの頁数などを付すことによる(例、『自然学』第三巻第六章206a14)。ただし『アテナイ人の国制』と「断片集」については当該巻(第一九巻、第二〇巻)の「凡例」を参照されたい。

一　本文の改行は必ずしも底本に従わず、内容に応じて適宜訳者が行った。また、読みやすくするため、場合に応じて本文中に箇条書きの記号を使用したり、(　)や傍点、「　」や、――などの記号を、適宜訳者が補足したりしている。

一　本文中の〔　〕は、訳者による文意の補足を明示するものである。『　』は著作名を示すために使用した。

一　ギリシア語カナ表記にあたっては、φ、χ、θをそれぞれπ、κ、τと区別しない。母音の長短は普通名詞においてのみ区別し、固有名詞では原則として音引きを省略した(例、ピロソピアー、プラトン)。またωは普通名詞の場合のみ音引き表記するが(例、ヌース)、固有名詞についても若干の場合は慣用に従った(例、ムーサ)。

一　各著作の「注」や「解説」で文献を参照する際には次項の要領で略記し、当該著作の「解説」の最後に掲げる文献表で書誌を示した。

一　近現代の著作を参照する場合には著者名と当該頁数を(同一著者による複数著作を区別する場合は著者名に出版年を添えた)、古注の場合には当該頁数および行数を示した。古注の略称や略号などは書誌の末尾に示した。ただし注釈書や翻訳については対応箇所を特定しにくい場合に限って頁数等を明記した。

一　必要に応じて「補注」を作成し、各著作本文の後に付した。

一　各巻末には、各著作ごとに固有名詞および主要概念、重要語についての簡略な「索引」を付した。なお別巻として「総索引」を作成する。

動物の発生について

今井正浩
濱岡剛 訳

凡　例

一　本訳の底本として用いたのは、次の書物である。

Drossaart Lulofs, H. J. 1965. *Aristotelis De generatione animalium*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit (Oxford Classical Texts), Oxford.

これと異なるテキストの読み方を採用した箇所は注によって示した。

一　底本では、Bekker の校訂にない文を挿入して行が増えた場合、増えた行の行数については、たとえば 33^{a}, 33^{b}, 33^{c} などと、行の数字の肩にアルファベットを付記して表示している。

一　Diels, H., und W. Kranz. 1951–52[6]. *Die Fragmente der Vorsokratiker*. 3 Bde. Berlin の参照指示については、たとえば、デモクリトス「断片」68B32 DK, エンペドクレス 31A73 DK などと略記する。前者の 32 はデモクリトスの断片番号を示し、後者の 73 はエンペドクレスのA項(生涯と学説)の資料番号を示す。

一　『動物誌』は、本全集での底本選択の関係から、同書第七巻から第九巻までの巻数が、本全集と従来の標準(Bekker)版(に準拠した旧版全集や岩波文庫)とで入れ替わっている(『動物誌』第七巻＝標準版の第八巻、第八巻＝同第九巻、第九巻＝同第七巻)。本訳では、箇所参照の際、巻数表示部分に標準版の巻数を(　)で付記した。例、『動物誌』第八巻(九巻)第一七章 616b19.

一　傍注においていわゆる「ヒッポクラテス医学文書」ないし『ヒッポクラテス全集』に収められている文書を

引用する際の著者名は、簡便のため「ヒッポクラテス」とする。なお、邦訳著作名の表記は、原則としてエンタプライズ版『ヒポクラテス全集』に準拠する。

目　次

凡　例
本文の内容目次
第一巻……一七
第二巻……一〇一
第三巻……一八五
第四巻……二三九
第五巻……三〇七
解　説（三四七）
索　引

本文の内容目次

第一巻

第一章　本書の目的　動物の発生の原因となる運動の始原について……一八
(1)動物の多様な発生の様態　(2)有血動物と無血動物　(3)雄と雌が交接するもの
(4)ひとりでに発生するもの　(5)植物の生成の様態
第二章　雄と雌が発生の始原であること……三三
(1)雄と雌の相違について　(2)能力による両者の相違　(3)発生に寄与する体の部分における両者の相違
第三章　発生に寄与する雄と雌の体の器官……二六
(1)雄の睾丸とその周辺部分　(2)睾丸の有無　(3)睾丸の配置　(4)雌の子宮とその周辺部分　(5)子宮の構造とその配置
第四章　発生に寄与する雄の体の器官(一)……二八
(1)睾丸は動物の発生にとって必要でないこと　(2)睾丸が存在することの目的について
第五章　発生に寄与する雄の体の器官(二)……三二
(1)雌と交接するための器官　(2)陰茎の有無　(3)睾丸の位置による動物間の相違について

本文の内容目次

第六章　発生に寄与する雄の体の器官(三)……三三
(1)魚類やヘビが睾丸をもたないことの原因　(2)魚類の交尾の仕方
第七章　発生に寄与する雄の体の器官(四)……三四
(1)ヘビが睾丸と陰茎をもたないことの原因　(2)ヘビの体の構造と交尾の仕方
第八章　発生に寄与する雌の体の器官(子宮)の配置と発生のしくみ(一)……三六
(1)子宮の配置をめぐる動物間での対立　(2)哺乳類と軟骨魚類の場合　(3)魚類、鳥類と爬虫類の場合
第九章　胎児を産む動物間での差異特性(一)――哺乳類の場合……三八
第一〇章　胎児を産む動物間での差異特性(二)――軟骨魚類、クサリヘビの場合……三八
第一一章　発生に寄与する雌の体の器官(子宮)の配置と発生のしくみ(二)……四〇
(1)軟骨魚類の子宮の配置と発生のしくみ　(2)哺乳類の子宮の配置と発生のしくみ
第一二章　発生に寄与する体の器官の位置(一)……四一
(1)雌が子宮を体内にもつことの原因　(2)睾丸を体外にもつ雄と体内にもつ雄がいることの原因　(3)子宮の位置による動物間の相違
第一三章　発生に寄与する体の器官の位置(二)……四四
(1)排泄のための管と精液が通過する管との関係　(2)哺乳類の子宮とその位置　(3)魚類の子宮とその位置　(4)軟骨魚類の子宮の構造　(5)精液が通過する管の位置
第一四章　無血動物(軟殻動物、軟体動物、有節動物、殻皮動物)の発生に寄与する体の器官と発生のしくみ……四六

(1)殻皮動物の特異な発生方式　(2)軟殻動物の交尾の仕方
第一五章　軟体動物と軟殻動物の発生に寄与する体の器官と発生のしくみ……四八
(1)軟体動物の交尾の仕方　(2)軟殻動物の交尾の仕方
第一六章　有節動物の発生に寄与する体の器官と発生のしくみ……五〇
(1)雄と雌が交接するもの　(2)ひとりでに発生するもの　(3)雄と雌の体の形状
(4)有節動物の交尾の仕方
第一七章　精液と月経血の自然本性をめぐって……五二
(1)精液と月経血に関するいくつかの問い　(2)「精液は全身からやってくる」と
主張している人々の説とその論拠とされるもの
第一八章　精液の自然本性をめぐって……五五
(1)「精液は全身からやってくる」と主張している人々の説に対する批判　(2)事
物の生成という観点に立った精液の働き　(3)精液は有用な余剰物　(4)精液が有
用な余剰物であることを示す証拠
第一九章　月経血の自然本性をめぐって……七六
(1)発生において雌がはたす役割をめぐるいくつかの問い　(2)精液は最終段階に
おける栄養(血液)の余剰物　(3)雌の月経血は雄の生殖液に対応すること　(4)月
経血は形成される胚子の素材にあたること
第二〇章　雌の月経血が発生においてはたす役割……八三
(1)「雌も精液を提供する」という説に対する批判　(2)雌の自然本性と月経血と
の関係　(3)月経血の浄化が生じるメカニズム
第二一章　雄の精液が発生においてはたす役割……八九

(1)雄の精液の働きをめぐる問い　(2)事物の生成という観点に立った精液の働き　(3)精液の中の運動が発生に関与すること　(4)鳥類の風卵の形成から明らかになる事実

第二二章　雄と雌が発生にどのように寄与するかという問い……九四
(1)胚子の形成が雌の体内で生じることの原因　(2)雌は胚子の素材を提供する　(3)精液は形成される胚子の部分ではないこと　(4)技術製作品との対比

第二三章　動物と植物との間の区別……九六
(1)歩行する能力と動物における雄と雌の区別　(2)植物において雄と雌が一体化していることの原因　(3)感覚の有無による動物と植物との区別　(4)動物と植物との中間的存在(殻皮動物)

第二巻

第一章　発生のしくみという観点に立った動物の分類、動物の体の諸部分の生成……一〇二
(1)雌と雄が分かれて存在していることの原因　(2)「何かのために」という原因(目的因)と「必然による」という原因　(3)発生のしくみという観点に立った動物分類(「胎児を産むもの」「卵を産むもの」「蛆(スコーレークス)を産むもの」)　(4)自然本性の熱　(5)動物の発生における始動(起動)因をめぐる難問　(6)動物の体の諸部分の生成過程

第二章　精液の組成……一一三
(1)精液の自然本性をめぐる難問　(2)精液は水と気息(プネウマ)から構成されていること

第三章　精液や胚子が魂をどのような仕方でもつのかという問い……二五
(1)物体としての精液をめぐる難問　(2)栄養摂取のための魂と感覚的魂　(3)知性のみが外からやってくること、知性のみが神的であること　(4)熱と生命の始原
第四章　体内に胎児を産むものの発生のしくみ(一)　――精液と月経血の分離と胚子の形成……二三
(1)月経血の形成とその原因　(2)精液が月経血を素材として胚子を形成していく過程　(3)始原としての心臓の形成　(4)子宮内で体の諸部分が分化していくプロセス　(5)デモクリトスの説に対する批判　(6)臍の緒を通しての栄養の獲得による胚子の成長
第五章　体内に胎児を産むものの発生のしくみ(二)　――胚子の成長過程……二四
(1)雌が雌だけで子を産まないことの原因　(2)胚子の成長過程における変化
第六章　体内に胎児を産むものの発生のしくみ(三)　――体の各部分の形成……二五
(1)気息による体の各部分の分化　(2)体の各部分が形成されていく順序をめぐって　(3)デモクリトスの説に対する批判　(4)同質部分(筋、骨、皮膚等)の形成　(5)脳と眼の形成　(6)骨格の形成　(7)歯の形成
第七章　体内に胎児を産むものの発生のしくみ(四)　――子宮内における胎児の成長……二六
(1)胎盤葉の形成　(2)デモクリトスの説に対する批判　(3)動物の生殖不能について
第八章　半ロバが生殖不能であることの原因……二七
(1)エンペドクレスとデモクリトスの説に対する批判　(2)論理による一般的な論証とその帰趨　(3)半ロバが生殖不能であるのは、ウマとロバの体の自然本性に起因すること